

## フィリピンのクリスマス

フィリピンではクリスマスの 2 週間くらい前から、比較的豊かな人たちの家をクリスマスキャロルのグループが次々に訪れ、歌っては寄付を募ります。面白いのは貧しい者たちが自分たちでグループを作り寄付をもらって回り、山分けする場合も多いということです。親からのプレゼントにあまり期待のできない貧しい子供たちにとっても、もちろんクリスマスは特別に楽しみな行事。25 日の朝は一張羅に着替え、裕福な家を少しでも多く回ります。期待するのはキャンディーなどのお菓子、運が良ければ小銭の「お年玉」。



考えてみると、貧富の差の大きいフィリピンでは、クリスマスというものは貧乏人が金持ちに対し「当然の分配」を求めるまたとないチャンスでもあるわけです。それに便乗して、チップをせしめようとする公務員もいるようで、フィリピン政府より「空港の税関などの職員が『メリークリスマス』を言う場合、物欲しそうにしないように」との通達が出されていました。「貧しい者は豊かな者から金をもらう権利がある」そう考えるフィリピンのクリスマスに、「汚職」が無くならない理由を感じました。

(末光 健志)

写真:クリスマス(25日)の朝、家々をまわる子供たちと親 ロスバーニョス 2005 年  
“アールディーアイ通信 No.32/2007”から

---

## パナマの花祭り

毎年 9 月第一週の週末は、中米パナマ共和国エレラ県ラスミナス郡の花祭りです。ラスミナスはパナマ市から西へ 300km ほどの、アスエロ半島の山間の静かな町です。この時期、この地域ではパナマの国花であるエスピリツ・サント(Espiritu Santo, Peristeria elata)というランの花が咲きます。この花は絶滅危惧種としてワシントン条約の附属書IIに取り上げられ、国際的取引が厳しく規制されています。

この花の開花にあわせるようにトウモロコシや稲の収穫が始まり、開花と収穫を祝う祭りが催されます。この祭りは週末に 3 日間ですが、ラスミナス教会前の公園は村人で大賑わいです。農民たちが周辺の村から農産物や手作りのお菓子、工芸品を持ち寄り、ヤシ葉で葺いた小屋を建て、販売や展示を行います。しかし、なんといってもこの祭りのメインイベントは「ミス花祭り」コンテストです。村ごとに荷車を色とりどりの花で飾り、民族衣装で着飾った各村自慢の娘が荷車の上にのぼり、荷車を牛に牽かせて町を練り歩きます。荷車の周りには太鼓、ギター、アコーディオンを中心とした村の楽団に先導され、村人が荷車を取り囲むように踊りながら練り歩き、祭りのフィナーレを迎えます。パナマの花祭りは、このような農民の素朴なお祭りです。



(高橋 貞雄)

写真:色とりどりの植物で美しく飾られた荷車に乗る少女 ラスミナス 2006 年  
“アールディーアイ通信 No.32/2007”から

## パラグアイの人々

首都のとなり町にあるアスンシオン大学工学部附属先端技術センターで、シニアグループ派遣のコーディネーターを務めている。テレビプログラム、通信網計画およびデジタル電送の分野で大学と工業高校の先生に技術上のアドバイスをする。仕事が早朝からで、午後1時過ぎには終わって余暇の時間がたっぷりある。趣味の柔道を青年や子供達とやるほか、休みはよく川釣りに行く。この国の人たちには人種や民族に関するこだわりが無いようで、すぐに親しくなれる。ニカラグア、ペルー、ドミニカなど中南米の国々で仕



事をしてきたが、こんなに親切で素朴で平和的な国民性の国は初めて。何かにつけアグレッシブで政治的あるいはイデオロギーの議論を日常的にする人たちと仕事をした後では、言い合いをしない、穏やかな人たちとの付き合いは、居心地がいいものの物足りなくなることさえある。どこのスーパーのレジでもニコッとされて印象はますますよくなるが、「何で？ どうして？ おかしいな、なぜこの国だけほかと違うんだろう」という思いが募る。

(攪上正彦)

写真:パラグアイ川にかかる大橋のたもととは絶好の釣り場 2007年

“アールディーアイ通信 No.30/2007”から

## モンテビデオ寸描

モンテビデオ市はウルグアイ国の首都で人口140万の大都会ながら、都心部でも交通渋滞がなく、喧騒の少ない静かな街である。全人口約340万のうち市と郊外に約200万が住み、残りは日本の半分弱の国土に分散しているために流入者、車が少ないのだろうか。車は掛かる諸税が高いというし、燃料も高い(ガソリンUS\$1.30/L、軽油0.89:07年1月)。移動には市内を密にカバーするバス路線の利用者が多い。我々余所者でも十分利用できる安全性と利便性から、シニア海外ボランティアの移動もバスである。

市の大概の道路に歩道が付き、街路樹があり、歩くのも楽しい。朝は事務所まで一時間ほど徒歩通勤している。渋滞、排ガス臭は気にならず、都心でも人を避けながら歩くのではなく、快適である。危ない地区や時間帯は在ると聞き、相応の対策は講ずるが、日常の買出しなどを含めて不安は感じない。難点は浮



いた敷石と犬の糞。常に足元に注意が必要である。前者は雨上りや水道水での掃除後、思わぬ跳ねに要注意である。後者は多いペットの散歩中のもの、さすが都心は袋持参だが多くはほったらかし。時を置かず消え失せる落下物は埃となるか、また、敷石の跳ねに混じるか。晴天のカフェテリア・レストランは軒先席が人気だが、埃が気にならない？

(森田 信晴 )

写真:通勤に往復する街路の朝 2006年

“アールディーアイ通信 No.29/2007”から

## メキシコの闘鶏(ペレア・デ・ガヨ)

闘牛と並んでお祭りを熱くする必須アイテムが闘鶏(ペレア・デ・ガヨ=闘う雄鶏)。チャンピオン級の戦いになるとかなりの賭け金が動くだけあって、興奮、熱気も否応無しに高まります。

闘鶏のタイプには毛爪に細いナイフを巻きつけて戦わせる「ナバハ(ナイフ)」型とナイフを付けない型の2つがあるようですが、メキシコでは「ナバハ」が圧倒的主流派です。メキシコ・ハリスコ州のトマトラン、ほかに娯楽など無いので闘鶏が唯一の楽しみ。もともと牧畜が盛んなところで、男の中の男を競うマッチョ・マンが大勢いるので熱くなり方がなんと言っても半端ではありません。



女房を質に入れたり、さらにはテキーラを煽り、興奮の末、二丁拳銃に最終解決手段を求めるケースもあり、日本の鉄火場に似ているところもあるようです。

何の因果か飛翔一殺を競う軍鶏も哀れなら、一喜一憂するマッチョ・マンにも人生の縮図のペレア・デ・ガヨです。

(増淵 清)

写真:トマトランのカーニバルの闘鶏で金を賭けて熱くなっている若者たち

撮影:Julio Cezar Paulin 2004年5月

“アールディーアイ通信 No.28/2007”から

---

## パラグアイで沖縄音楽

パラグアイ南部にあるエンカルナシオンという町に住んでいる。赴任にあたり、学生時代から郷土芸能研究クラブに入って親しんできた琉球音楽の三味線と笛を携行した。以前は三味線だけでなく笛、太鼓、踊りもやり、もう30数年になるが、今は三味線と笛だけになった。三味線と書いてサンシンという。笛は明笛(ミンテキ)といわれる、孔(指孔)が6つの琉球横笛である。レとラが抜けた流球音階で吹く。

隣国のアルゼンチンでは「島唄」がサッカーの応援歌に使われていて、エンカルナシオンでも勤務地のカピタンミランダでも、演奏したらパラグアイの人たちもこの唄をよく知っていた。どう伝わったのか、パラグアイのFM局の人がやって来て弾いてくれというので、三味線にあわせて沖縄の言葉で歌ったら国中に流れて大変な反響が起こった。老人クラブや、プラザ(広場)でも街頭でも弾いた。



パラグアイの人と組んで演奏会もやったが、独特の琉球音階の沖縄民謡が日本の民謡とはかなり異なると分かって、興味津津のようだった。

(小渡 陽善)

写真:演奏をFM局が録音 2006年

“アールディーアイ通信 No.28/2007”から

## ケニアの日曜学校で

ケニア国西部、リフトバレーの西側の縁に近いところに位置するケリチョという町は、標高 1600 メートルから 2000 メートルの高原地帯に延々と広がる紅茶畑に囲まれています。この町の、英国統治時代から使用されている瀟洒な雰囲気があるケリチョ・ティーホテルに滞在する機会がありました。ホテルの前にカトリック教会があります。ケニアは出生率が高いので、教会にはぞろぞろと子供たちが何処からともなく集まっ



て来ます。礼拝後に子供たちは日曜学校で聖書の勉強をします。日曜学校用のビデオや紙芝居もなく、聖書は先生が一冊持っているだけです。先生は、これを読んで聞かせた後に、子供たちに聖書暗唱と寸劇をさせます。私が、保健センター職員の研修を行った時に、グループ毎に出し物をしてもらい競争させたら即興の寸劇が随分上手だったのです。その素地が教会の日曜学校にあるのかなと感じました。

(荒木 京子)

写真: 礼拝用の服を着ておしゃれをした子供たち 2006 年

“アールディーアイ通信 No.27/2007”から

---

## モザンビーク・マシアの米作り

アフリカ南部、東海岸に位置するモザンビーク。日本人にはまだまだ地雷や洪水といった暗いイメージで語られることが多い国ですが、実は明るく気候もよく、海に面しているため海産物も豊富で、首都マプトにはディスコやナイトクラブ等の夜遊びスポットも充実していて、なかなか楽しい国です。

そんな首都からわずか 180km の町での米作りの様子を紹介します。その地区はかつてポルトガル占領時代、数千ヘクタール規模で営農していたのは夢のあと、壊れて放置された大型コンバインを尻目に、近くの農家が細々と野菜や稲を作っています。彼らは日の出前にてくてく30分位歩いて田へ行きます。機械は一切なく、牛や人力で耕し、代掻きはせず種籾の直播。簡単な覆土はしますが、発芽するまで鳥の樂園状態。

除草や水管理も人の手。その後、稔った稲を守るため2ヶ月間朝から晩まで人が付きっきりで鳥追い作業を行います。収穫は鎌で、脱穀はドラム缶に



穂を叩き付け、散らばった籾をかき集め、袋に詰めておしまい。

すべての作業が驚きでしたが、かれらはかつて機械化農業に携わっていたにも関わらず、こんな米作りをしているのがますます信じられないって感じでした。

(興村 暁子)

写真: 脱穀風景 2006 年

“アールディーアイ通信 No.27/2007”から